



# 歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし⑧

中国山地一帯では、砂鉄を原料とするたたら製鉄が展開していた。たたら製鉄は、箱形土製の炉に、砂鉄と木炭（大炭）を投入して、鋼や鉄の原料を産出し、大鍛冶場で加工して各種の鉄素材にするものである。

## ■松江藩で値段高騰

明治前半の出雲の史料では、一回の操業に大炭が約十七ト必要で、年間六十回操業として約千ト。森林面積にして九十畝にあたり、鍛冶用の小炭なども含めると百三十畝必要。さらに森林再生に三十年とすると、たたら一カ所に森林三千九百畝が必要という計算になる（「横田町史」）。松江藩では、享保十一（一七二六）年にたたらたたらの数を限定し、森林もそれぞれに分配して持続可能な生産体制を作った。それが後の巨大山林地土の基礎になったという。

# 県北の森林 争奪戦に たたら製鉄と燃料炭

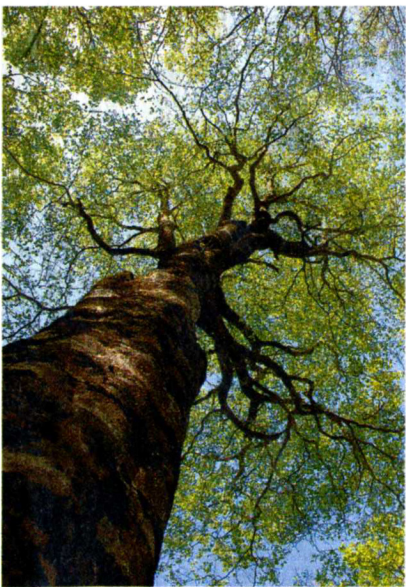
さて、幕末のことである。その松江藩でも炭不足から家庭用の炭値段が高騰し、城下商人から、広島藩領備後六の原（庄原市西城町、ひろしま県民の森付近）の炭を松江に運びたいという願書が出された。その時の史料に、出雲にはないフナの大木が六の原には多くあると記している。

## ■鳥取藩からも需要

六の原で生産される炭は、家庭用ではないし運賃もかさむ。無謀な企てだが、規制をくぐり抜けて、自由に大炭を販売する意図もあったらしい。実は、すでに広島藩領の俵原（庄原市高野町）や越原（同比和町）から、奥出雲のたたらへ大炭が供給されており、六の原も開始直前であった。

また、鳥取藩領では折からの鉄景気で、たたらが乱立し、やはり六の原から上阿毘縁（鳥取県日南町）まで、大炭を運びたいと申し出ている。「小鉄（砂鉄）七里に炭三里」と言われるが、それをほるかに越えた距離である。

六の原にもたたらたたらの遺跡はあるが、出雲や伯耆からの需要もあって、幕末には資源争奪の場となっていた。こうしてみると、現在も比婆山山頂部に残るフナ林が、いかに貴重な存在であるかが実感できる。



芽吹きめぶきの春を迎えた比婆山のフナ

（広島大教授 佐竹昭）

土曜日に掲載します